

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

春の使者と呼ばれるフキノトウ。春の便りを届けることから、フキノトウには「待望」の花言葉があるのだが、コロナ禍で長い辛

抱の時を過ごす人々には、フキノトウの風味のように、心にほろ苦い社会が続くのだろうか。春に虫と書いて蠢く、虫が動き始める時期だ。残雪多い里にも、暖かい日には、虫を見かけるようになってきた。優しい感情ではなく、農産物生育に害虫と考えてしまう自分が情けないと思ってしまう時もある。

しかし小動物の生命力に驚かされている。田畑の畦には積雪状態の中でも活発に活動した痕跡を多く見かける。大半を地中で過ごすモグラは餌を求めて長いトンネルを掘り、巣をつくる。奥深い巣に身を隠し、実際は地表に顔を出す事はめったになく、どこに潜伏しているかも分からない。まるで新型コロナウイルスのようだ。

残雪の多さから、今年年の作付けを躊躇する声や、高齢化や後継者不足により耕作を断念するケースの多さに、耕作地保全が心配になる。農業に批判する世情に敢然と立ち向ってきた農民作家を自称する山下惣一さんの著書「農の明日へ」で、はったりと農業批判が途絶え

た」と書いていると河北新報のコラム河北春秋さんが紹介した。ウクライナ侵攻で、小麦の輸出はロシアとウクライナで世界の3割の実態が世界に発信され、国際相場は急騰、小麦粉の値上げは急速に拡大、今後の動向が気かりだ。農産物の輸出入では日本は輸入が10兆円、輸出が1兆円。世界先進国の中でも輸入への依存度が極めて高い。だが日本で生産できる米は、高価格などもありこれまで

## 米の消費拡大は食料不足解決の第一歩だ

敬遠されていたことも事実だ。牛乳は消費が落ち込むと「牛乳は、健康に良い。皆で積極的に飲みましよう」とのテレビ広告など情報発信がされる。だが残念な事に米の消費拡大での大規模な情報発信の記憶はない。食料確保に懸念が多いこの時期だからこそ、「コメを消費拡大し、日本の食料自給率を高めよう」の気運の高まりを期待したい。産地も、コメを使用した地場産品の取組競争が始まる見込みだ。

『山の政治と経済』の著者の森巖夫さんは、「大過なく」「競争せず、危険に挑まず」「苦勞せず」「げんかせず」「根気がない」人間になるなど「カ行人」(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)間はダメだと提言している。積極的な取り組みをして行くべきなのだろう。



4月16・17日大町で開催の県大会に向けての審判員研修会。真剣さが伝わってくる。